

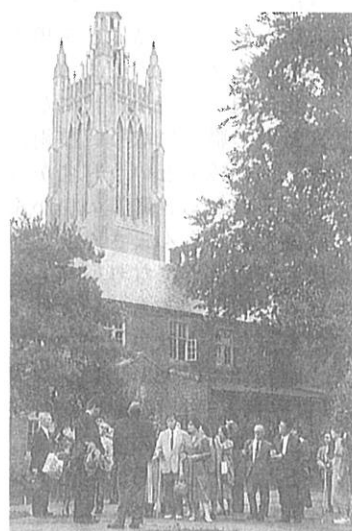
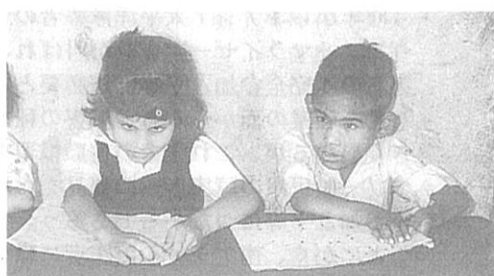
LIGHT_{OF} LOVE

Overseas Project for the Blind - Plans and Reports

No. 9 1994. 8

愛の光通信

東京ヘレン・ケラー協会 海外盲人援護事業事務局



盲教育につづく盲人職業の開発

From Integrated Education to Self-support

(海外援護担当理事 井口 淳)

ネパール王国バラ地区で実施しているCBRの一環として、土間に放任されている盲児をみつけ、小学校に入学させる事業を行っている。しかし、親は「目の見える人でさえ仕事が無いのに、盲人に仕事などある訳が無い。盲人に勉強させても無駄なことだ」とフィールド・ワーカーにいうそうである。勉学は就職のためという考えに少し抵抗を覚えるが、今のところ仕方のないこととして、盲人にも仕事があることを現実認識させることが必要だと感じるのである。

我が国でも徳川時代になって、按摩や鍼灸が盲人特有の職業になり、技術に秀れた人には、幕府から「検校」という官名が与えられたものであった。それから、職業のいかに問わず、盲人ならば誰でも「あんまさん」と呼ぶ者もいて、盲人の代名詞のようになり反発もあるが、それにしても盲人に何の職業もないより「あんま」という仕事があったことは良とすべきであろう。

昭和58年(1983年)にシンガポールで、WCWB(世界盲人福祉協議会)第6回アジア会議があり席上、日本の盲人の主な職業は「マッサージ」であると話したところ、東南アジアの代表は一斉に嫌な表情を浮かべた。無理もない話で、東南アジアの国でマッサージといえば、売春の代名詞に当たるらしい。そこで日本でいうマッサージとは医療、スポーツマッサージであると説明したところ、東南アジアの諸氏は、表情を一変して和らげたそうである。

今一つ、マッサージを職業とすることが、困難だと言われている国がある。それがネパールで、カーストの影響である。ところが、鍼灸にはマッサージのような抵抗もなく偏見も無い。むしろ中

国の影響で、医師としてのプライドを持ち、一般からも尊敬されているほどである。ただ、盲人の職業としては、考えていないようだ。

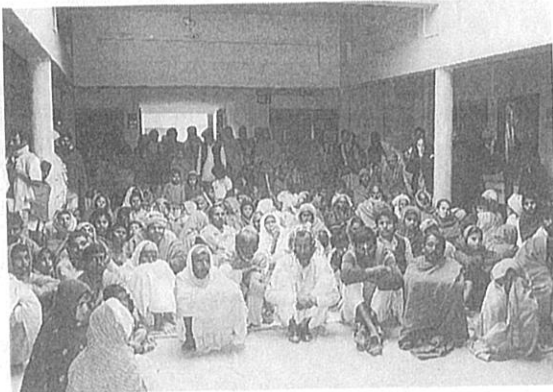
日本では盲人の主な職業として成立していると説明すると、日本は教育の程度が高いからそれができるが、自分達の盲教育はとてもそれに及ばないとガッカリした表情を表した。

昨年「アジア太平洋障害者の十年」が始まり、ノーマライゼーションが叫ばれ、それには障害者の「完全参加と平等」が必要とされている。これを職業の面からみると障害の種類により、大きく異なるが、これまでの古い慣習を無くすことや、一般民衆の障害者への偏見をただすことも完全参加と平等につながるであろう。

とにかく、南アジアの障害者に職をつけるには、まず、学校教育から始めるべきであり、その上で、職業訓練を考えなければならないと思う。

In January 1994, Tokyo Helen Keller Assn. (THKA) sent 4 delegates to visit Bara CBR Center for consultation, and on this occasion they went to Rauthat District to see and comfort about 100 disabled people who suffered greatly by the flood.

Immediate past chairman of NAWB, Dr. Prasad, a Senator whose home town is Rauthat made an inspection of this district right after the flood, and he made request to Mr. Iguchi, director of THKA, for some help. Accordingly, when Mr. Iguchi visited Rauthat in January, he and Dr. Prasad handed Rs. 500 (about ¥1,000) to everyone. This amount of money was the same as that which the Nepal Government gave to each family for help. This may not be enough, however, all the sufferers were comforted greatly and it was reported in the national newspaper.



洪水被災地の障害者救援

Relief Action for the Disabled in Flooded Area

洪水被災地に行く



昨年8月、ネパールは史上空前の大洪水に見舞われ、各地で大きな被害が出ました。特に、バラ郡に隣接するロータート郡の田圃は、水深2メートルの巨大な湖と化し、5カ月たった後も名残の湖がぼつぼつ見え、そこでは洗濯や水浴びが行われていました。この地の被害の大きさは、我々の想像をはるかに越えるもので、被害の大きかったバグマティ河では、河原の真ん中に巨木が一本そそり立っており、奇妙な景観を作っていました。本来はこの木の位置が堤防で、ダムの決壊により、70軒の人家もろとも流されたのです。400メートル程流れ、奇跡的に生き残った少女は、5カ月たった後も脅えて口が聞けない状態で、その衝撃の大きさを表していました。また、まったく被害を受けなかったという学校でさえ、床上1.5(m)あたりには浸水の証しが黒い線として残り、復興が手付かずの教室には、うずたかく土砂が堆積していました。また、被災報告のなかったバラ郡でも、被災家族が70もあり、砂糖黍の集積地を不法占拠していました。ここの被災地へは四輪駆動車で行くことができず、象に乗って回ったのですが、一面の田圃は巨大な河原に化けていました。

洪水の直後から、現地C B Rセンターは地元で義援金を募りこれを食料に代え、すぐにロータートへ向い炊き出し等の救援活動を行いました。同じ被害でも、家畜や家財道具を持ち出せたバラの被災者は運が良く、鉄砲水で家族を無くし、今日の衣食に事欠く被災者の救援が先決だったのです。

心配された伝染病の流行はありませんでしたが、当協会が事業管理を兼ねて現地を調査した12月でも、まだ至る所で道路が寸断され、生々しい被害爪痕が残っていました。

ロータート郡への洪水見舞

本年1月当協会は、バラ郡での事業管理を兼ねて、ロータート郡に代表団を派遣し、洪水で悲惨な状況に陥った障害者約百人に、見舞い金を贈りました。この見舞いは、同郡出身で前N A W B会長のプラサド上院議員が、洪水直後に現地を視察し、特別に井口理事に要請してきたものです。

当日、井口理事とプラサド議員は手分けして、ネパール政府が被災家族に贈った金額と同額の、500ルピー(約千円)を被災障害者ひとりひとりに手渡しました。必ずしも充分な金額とは言えませんが、それでも災害で打ちひしがれていた障害者には大きな励ましになったようで、現地の国営新聞にも大きく取り上げられました。

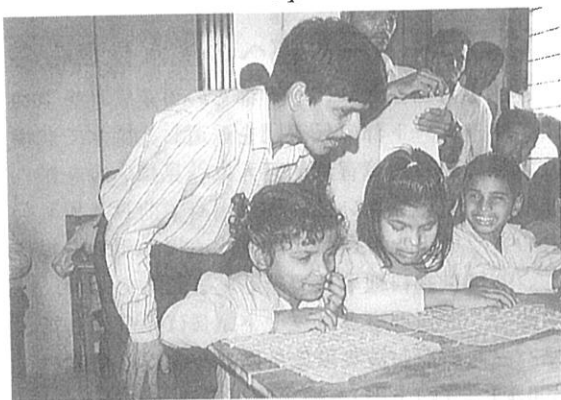
海外援護事業記録

(1993 / 6 - 1994 / 5)

- 93年6月 * 国際ボランティア貯金配分金決定 (6/18)
- * サンシャインシティ・コンベンションセンターにおける、プロオーディオ総合機器展'93においてチャリティ・バザーを開催 (6/23 - 25)
- 7月 * 「愛の光通信 No.8」発行
- * 長野市にある鐘紡若里自由学園にて、ネパール盲人援助事業のスライドと講演を行う (7/25)
- 8月 * 中野北郵便局にてネパールでの盲人援護事業に関する写真展を開催 (8/11 - 31)
- 9月 * 米国東海岸スタディ・ツアー (9/16 - 24)
- 10月 * 海外援護事業十周年感謝の集い開催 (10/1)
- * 日比谷公園で開かれた国際協力フェスティバルにて活動写真展を開催 (10/2、3)
- * 「アジア太平洋障害者の十年キャンペーン'93 国際NGO沖縄会議」に参加すると共に、会場にて写真展を開催 (10/18、19)
- 11月 * なかのZERO小ホールにて、ジャズ・チャリティコンサート開催 (11/19)
- * 飯田橋セントラルプラザにて、ネパール活動写真展開催 (11/27、28)
- 12月 * 技術指導・事業管理二名派遣：福山、神崎 (12/5 - 12/16)
- 94年1月 * 技術指導・事業管理四名派遣：井口、佐藤、佐々木、前山 (1/9 - 1/20)
- * 研修生 H. N. アルヤール氏来日 (1/20)
- 2月 * 大阪市立盲学校で開催された「国際点字普及シンポジウム」にて講演 (2/26)
- 4月 * 研修生 H. N. アルヤール離日 (4/17)
- * 上野公園で開かれた「緑のフェスティバル」にてネパール活動写真展開催 (4/29)
- 5月 * 技術指導・事業管理一名派遣：福山 (5/15 - 5/26)

バラ郡の特殊教育

Special Education in Bara District



Learning braille at Dumarwana School

ネパールにおける盲教育は、普通『統合教育』という方法で行われます。これは我が国で一般的に行われている盲学校中心の特殊教育と異なり、普通校で盲児を受け入れ健常児と共に教育を行う方法です。この方法だと、盲学校を新たに開設する必要が無いので、非常に経済的に特殊教育を始めることができます。

私たちは、昨年よりバラ郡の五つの学校でこの統合教育を始めました。その中心になっている学校は、ドゥマルワナ高校です。同じ統合教育でも、この学校と他の四つの学校とでは、運営システムに少し違いがあります。ドゥマルワナ校は寄宿制で、他の学校は通学制なのです。単純に費用の面だけ考えるなら、通学制がはるかに安くつき効果的です。しかし、盲児は一カ所にまとまって住んでいる訳ではないので、実際はそう簡単には行きません。これは、日本の盲学校のように学生寮が併設されていて、盲児の8割方がそこに寄宿している事情と似ています。

✍️ 寄宿制統合教育校 📖

ドゥマルワナ校では、現在12名の盲児が学んでいます。まだ、寄宿舎が無いので教室に簡易ベッドを持ち込んで、全員ここに泊まっての共同生活です。トイレもシャワーも無く、不便な生活を余儀なくされていますが、みんな元気に朗らかに勉強しています。特にクリシュナ君(10歳)は、晴眼児を含めた昨年末の進級試験で、学年トップの成績を修めました。彼は幼くして両親をなくし、天



Two blind boys entered Dumarwana this year

涯孤独の身の上で、自分の本当の名前も知りませんでした。そこで、NAWBのアルジャー爾事務長が名付け親になり、ここで勉強することになったのです。

今年度は、郵政省ボランティア貯金の配分金を受けて、この学校に待望の寄宿舎ができます。シャワーもトイレも、男女別々のベッド・ルームも完備したレンガ造りの平屋です。これでやっと、清潔で健康的な生活をおくることができそうです。

📖 パタライヤ小学校 📖

私たちがカトマンズからバラへ向かう道は、インドへと連なる幹線道路です。この道からバラ郡を起点に、垂直に東に伸びる国道があります。俗に盗賊街道と呼ばれる道路で、旧ソ連の援助で敷設されました。その時造られた作業小屋を基に、パタライヤ小学校は開校したのです。生徒数約240名、教師4名のこじんまりとした学校で、ここに男女の盲児がひとりずつ学んでいます。ここは、バラ郡にある3つの通学制統合教育校のひとつです。女



At Pathalaiya Primary School

この校長が、リソース・ティチャー(点字教師)も兼ねており、ある意味では、理想的な統合教育校です。というのも、統合教育校開発の最大の課題が、学校長の理解を得ることだからです。幸いバラ郡の統合教育校では、現在そのような問題はありませんが、過去にはリソース・ティチャーと盲児が学校内で孤立するということもあったようです。また、統合教育校を新たに開発する際は、この問題がいまだに大きく立ちはだかります。

パタライヤ校の現在の問題は、教員と校舎不足ということでした。確かに教室も4つしかなく、しかもその一つは穴蔵のような作業小屋ですから、劣悪な教育設備がほとんどの、この地の学校の中でもさらにひどいありさまです。アット・ホームなとても良い学校なので、とりわけ気の毒です。

新規統合教育校の開発

カトマンズでの点字教科書作りが軌道に乗ったこともあり、私たちは一昨年度から統合教育の普及に力を入れてきました。そして、今年はバラ郡の枠を超えて、隣接するロータート郡を初めとする3つの農村僻地で寄宿制統合教育校を開発する計画です。開発というのは、このために新たに学校を開校するのではなく、既存の学校で盲児が学べるようアレンジすると共に、そのための支援を行うという意味です。

開発に当たってはこれまで通り、NAWBの方針を重視すると共に、学校当局や地元住民の意向も尊重しながら慎重に進めていきます。

煙突のプレゼント

本年4月3日、創造性教室(代表:坂部正登)一行5名は、ドゥマルワナ統合教育校を訪問し、煙突つきのカマドを同校にプレゼントしました。

ネパールでは一般的に煙突が普及しておらず、炊事のたびに煙が部屋中に充満します。「創造性教室」は、人体への煙の影響や、貴重な森林資源である薪の節約のために、煙突つきの改良カマドの普及と医療事業をネパールで行っています。同教室は、バラ郡で行っている当協会の活動を知り、日本から手弁当で現地に飛び、今回の訪問になりました。カトマンズからは当協会の連絡員が同行し、現地ではCBRセンターの車輻が空港まで迎えに出て、一行を歓迎しました。



Making a stove from brick and clay

INTEGRATED EDUCATION

Education for the visually disabled in Nepal is called "Integrated Education". This system is different from Japan where there are special schools for the visually disabled, however, blind students in Nepal are accepted in the ordinary schools and study together with sighted students. Under this system it is comparatively easy to start special education for visually disabled children, because there is no need to build a new school and it is economical to start special education in this way.

Last year, we started integrated education in 5 schools in Bara District, and the Dumarwana School is different from the other 4 schools though they are all integrated education. The Dumarwana school is a dormitory system while the others are a day school system. When we think of the expenses the day school system is much cheaper and more effective, however, blind students are not always living in one place, therefore, it is not easy to say what is the best. In Japan most of the schools for the visually disabled have dormitories attached to the schools and 80% of the students are living in the dormitories.

This year we are planning to develop integrated education schools with dormitories in 3 remote agricultural countries in Rautahat District adjacent to Bara District. This does not mean that we will build new schools. We will support the schools which already exist there so that they can change and arrange the schools where blind children can study together with sighted children. At the time of development we attach importance to the policy of NAWB. We also respect the intentions of the schools and people in those places and carry on our plan with careful consideration.



An open-air class at Pathalaiya

農村で自立する盲人たち：バラ C B R

Community Based Rehabilitation for the Blind in Bara

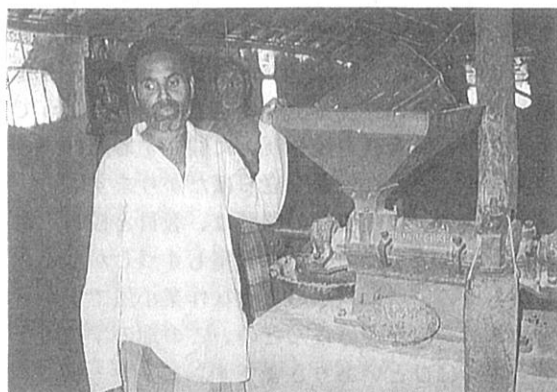
障害者の社会的自立とは、職業を持ち、自らの生活を自分の力で支え得る状態をいいます。私たちがC B R事業と呼んでいる、失明者を対象としたリハビリテーションもこれが最終目標です。これまでバラ郡で、個別訪問調査、歩行訓練、日常生活技能訓練、職業訓練などを積み重ね、無利子の貸付金によりまがりなりにも自活した盲人は、家畜の飼育などの農業66名、雑貨店経営2名、精米業2名、仲買業3名、計73名です。

「農業が盲人の適職だ」なんてとても言えませんが、典型的な農村地帯であるこの地の盲人のほとんどは、失明前にも農業を営んでおり、それ以外には考えられないのが実情です。一人当たりの国民総生産が、年間 180米ドルという貧しさが、逆に牛1頭飼えば自活できるという皮肉な側面を支えています。もっとも小学卒程度の学力があれば、家族の助けを借りて、もう少し割の良い職業を選ぶことも可能です。雑貨店とか、精米業というのがそれです。立地条件とか、商売のノウハウも必要ですが、これだと自分の生活だけでなく、大黒柱として一家を養うことも可能です。

㊦ 小さな精米工場

東京にいるネパール人に、農村部ではどのようにして精米するのか聞いたら、足で杵をつく格好をします。それにしても、貸付金が大きいのという、それでは水車に違いないといいました。盲人と水車小屋のイメージが結び付かなくて、C B Rセンターに問い合わせると、動力はジーゼル・エンジンだといえます。盲人がどのように精米工場を運営するのか、俄然興味が出てきました。

入るまで家畜小屋だとばかり思っていた所が精米工場で、エンジンの排気ガスはパイプで外に逃がす仕組みになっていました。力仕事をする使用人をひとり雇い、全盲の経営者が高齢の父親の手を借りて経営しています。機械の保守点検はその都度小まめに技師が出向くそうです。ここも貧しい回教徒の村で、盲人の彼は教育もあり地域のリーダーのひとりだといえます。



A blind man opened a rice mill

☺ イスラム教徒の村で ☆

他民族、多言語国家とはいえ、ネパールではどこでも子供に「ナマステ」と挨拶すれば、必ず返事が帰ってくると堅く信じていましたが、これは間違いでした。この村の住人は、全員回教徒で手を合わせて挨拶してはいけません。しかも、小学生とおぼしき年齢の少年数人に、簡単なネパール語で話しかけても反応がありませんでした。学校に行っている子供は少ないのです。

しかし、私たちが訪問した盲人宅では、本人も家族もネパール語を話しました。小学校卒業程度の学力があればこの地で商売に必要な、ネパール語やヒンズー語が話せ、計算ができます。彼はC B Rセンターから無利子の資金を借り、自宅の辻向かいに4畳半ほどの小屋を建て、この春雑貨店を開きました。夜になれば、ここに泊まるということで店の三分の一は、粗末な寝台が占領しています。店番は、15歳の孫が手伝っていました。良く気が利く聡明な少年で、顔立ちは幼くてももう立派な1人前の大人の働きぶりでした。



A blind man opened a general shop

失明防止事業

Bara Eye Care Project

私たちはCBR事業の一環として、ビタミンA剤配布による失明防止にも力を注いできました。

昨年秋、ネパール政府はユニセフの支援を受けて、失明防止を国家事業として行うことに決定しました。そして、私たちのフィールドであるバラ郡から、この事業は手掛けられることになりました。私たちのこれまでの地道な努力が、大きく評価された結果です。

ところで、国家事業になったのだから私たちはこの事業からまったく手を引いていいのかというと、そうではありません。実情は、ビタミンA剤は手当するので後はよろしくということなのです。CBRスタッフの苦労は今までと変わりませんが、これまで渋々協力してきた、地元行政機関が積極的になってきたのは嬉しいことです。



Dropping lotion in to eyes

失明防止講習会

本年3月3、4日、バラCBRセンターを会場に失明防止講習会を開きました。栄養失調が多い地域では、失明防止のためにビタミンAの投与が効果的であることは良く知られています。しかし、薬ですから闇雲に配ればいいというものでもありません。また、平行して栄養改善や衛生知識の普及も行う必要があります。このため、ビタミンA剤配布に当たっては、専門家を招き講習会を開いて来ました。これまでの参加者は、学校の教員とフィールド・ワーカーが中心でしたが、今回はそれに地元の保健機関の職員や報道陣も大勢詰め掛け、かつてないほどの盛況でした。

バラ眼科診療所

これまで、派遣先の病院の都合により1週間に一回、あるいは2週間に一回に限られていた無料眼科診療が、今年から眼科助手(OA)の手により、CBRセンターで毎日行われるようになりました。

医師の絶対的不足を補うために、WHOの勧告でネパールには医療助手(MA)という制度があります。これは、看護婦と医師の間に位置する身分で、診療から「処置」とよばれる簡単な手術まで行う資格です。そして、眼科におけるMAは特にOAと呼ばれます。

NAWBは、CBRセンターの職員の中から優秀な人材を選び、トリブバン大学の医学部に送り教育を受けさせました。そして、教育病院の所定のコースを終了したOAがこの度、バラ眼科診療所に常駐することになりました。もちろん、医師の派遣はこれまで通りお願いして、医療水準の低下を招かないように注意しなければならないのは言うまでもないことです。

In Bara District we have carried out research making a house-to-house visit, and we have given mobility training, independent living training and vocational training to the visually disabled so far. There are 73 blind people who could start their own businesses with the help of loans free of interest-though not quite satisfactory:

- 66 people — agriculture and livestock raising
- 2 people — grocery store
- 2 people — rice mill
- 3 people — broker

We can hardly say that "Agriculture is the best job for the blind", however, most of the people were engaged in agriculture before they lost their eye sight. Therefore, we can not think of any other ways in this situation.

BARA EYE CARE PROJECT

Under our CBR Project we have made a great effort for Eye Care by distributing Vitamin A capsules. Last autumn, it was decided that Nepal Government would start a national project of eye care receiving assistance from UNICEF. The Nepal Government will start this project from Bara District where our CBR Center will cooperate with them. Our staff members will work hard as before. We are happy that our steady efforts have been recognized by the Nepal Government.

EYE CARE SEMINAR

An Eye Care Seminar was held at Bara CBR Center on March 3, and 4, 1994. At the previous seminars most of the participants were school teachers and field workers, however, this time the seminar was well attended by local staff members of health organizations and many press corps as well.



Listening to Helen Keller's story at Perkins School for the Blind, Boston

パーキンス盲学校の印象

下沢仁

この度のツアーは、渡りに船の思いで申し込んだ。参加者は28名で、夫婦が4組、親子が1組、知り合いのペアが2組、単独の男性が3名・女性が6名、主催者を含めて晴眼の誘導スタッフが5名であった。

私たちはボストンに2泊して、最初に訪問したのは、サリバン先生とヘレン・ケラー女史の母校であるパーキンス盲学校である。ここには日本からも多数の視覚障害者が留学したが、その第1号は横浜訓盲院の2人の女生徒であった。猿田恵子さんは中等部4年生、武井イネ子さんは1年生で、私と同級であったが、1931年9月に渡米して34'年の7月までパーキンス盲学校に在学した。彼女たちの帰国後数年間、私たちは横浜訓盲院の教師として生活を共にしたので、パーキンスのスクールライフについてはことごとくに聞くことができた。例えば、1日8時間の授業には、生徒たちの個性と進度にあわせて1人ひとりに別々の時間割が与えられるということ、寄宿舎はカテージと呼ばれて、数棟のカテージに先生と生徒が小人数に別れて家庭的な生活をしているということ、体育が盛んで特にローラースケートが好まれるということ、ふだんは男女のカテージがはっきり別けられているが、合唱の時だけは一緒に楽しかったこと、などである。それで、私の心の中には自然、パーキンスの輝かしいイメージが出来上がってしまった。

ところが最近になって、アメリカでは障害児の統合教育がすすんで、パーキンスは重度の重複障害児の学校になってしまったという報告を聞くようになった。そしてこのたび、自分でその事実を確認した次第である。

パーキンス盲学校の生き生きとした生徒たちのイメージを抱いてここを訪れた私に、今日のパーキンスが一抹の淋しさを感じさせるが、それはこちらの勝手な感傷であろう。どんな重度の障害児にも教育を受ける権利がある。単一障害の児童が普通の小中学校に進んで、その後これまでは教育の機会が与えられなかった重度の障害児を受け入れるようになったのであるから、それは障害児教育の幅が広がり、奥行きが深まったということである。重度の重複障害児教育には以前にもまして熟練した技術と暖かい心が要求されると、教室を案内して頂きながら感じた。ここでは子供たちの写真撮影を禁じているが、それは自ら撮影を拒否できない者の人格尊重である。パーキンス盲学校の教育は現在の社会の要請にこたえた取り組みである。

ところで、60年前に2人の女生徒をパーキンス盲学校に送った横浜訓盲院も、今は他の盲学校が受け入れられないような重度の重複障害児の学校に変貌している。

9日間のこのツアーは見学と観光で充実していた。なお書きたい事はたくさんあるが、最初に訪れたパーキンス盲学校の印象を記して筆を置く。

ヘレン・ケラー

Helen Keller Study

「ネパールもいいけど、女史の母国も一度は訪れたい」という国ツアーは実現しました。視覚障害者単独の海外旅行には、様々な程度の割増で単独参加も歓迎しているため、このような眩しきところのツアーでは、女史の母校であるパーキンス盲学校とハーバ彼女が相談役を助めたアメリカ盲人援護協会(AFB:ニューヨーク)などをリフ校シュレジンガー図書館では、現存する女史の成績表など貴きと語られました。なお、この『女性史専門図書館』の訪問はハリ実現したもので、当日彼女はボランティアとして通訳も引き受

女史の足跡を訪ねて

島田陽子

私は今回のツアーでもたくさんのことを学び、たくさんの思い出を作ることができました。足跡をたどるということでは、彼女が学んだパーキンス盲学校や、ラドクリフ校、力を注いできたAFBや、ライトハウスなどの訪問は、大変楽しみにしていました。ラドクリフ校で、ヘレン・ケラー自筆の答案用紙に触れた時、AFBで、彼女の遺品に触れた時、そして、何より嬉しかったのはヘレン・ケラーとアン・サリバンのお墓に行くことができたことでした。全て寄付で、90年近くかかり、去年完成したという二人の眠るワシントン大聖堂に行った時は、何とも言えない感動を受けました。

ボストンは緑豊かな、静かな町、まさに学び舎の町。もう一度、行ってみたい、そしてゆっくり散策してみたい。ワシントンは首都らしく、計画的につくられた、整った町。そして、ニューヨークは活気あふれる若者の町、24時間動いている町。ケネディー空港を降りた時の鼻をついた排気ガスの匂い、ホテルの窓から一晩中聞こえていたクラクションの音、さすが大都会だなあと感じました。最後の夜、本場マンハッタンで聞いたジャズも最高でした。今こうして点筆を走らせながら、楽しかった旅行のことを思い出しています。

ツアーを終えて

田中利恵子

今回のアメリカツアーに参加したことは、私にとってまたひとつ大きなプラスになるものでした。アメリカには、いつか何かの形で行ってみたいと思う国のひとつでしたので、こんなに早く夢が叶うとは思っていませんでした。

私自身が一番楽しみにしていたのはパーキンス盲学校でした。子供の頃大きくなったら留学をしたいと思っていたこともあり、実際に、今の盲学校の教育は重複障害者



Touching the wall of the Lincoln Memorial, Washington D.C.

史の足跡を訪ねて

our to the East Coast

昨年の「ネパール・ツアー」の参加者のつづきをきっかけに、米内があり事実上参加は困難です。当協会が企画するツアーは、25(%)のみです。

大学ラドクリフ校(ボストン)、女史が眠るワシントン大聖堂(ワシントンD.C.)に關係機関を訪問し、どこでも温かく迎えられました。特にラドクリフ資料を駆使した丁寧なレクチャーがあり、女史の人となりが生々しく、ロード大学の院生である前田弘美さんの貴重な助言と、アレンジにしてくれました。

や中途失明者のための教育を行っているということで、私の期待とはちょっと外れていたのですが、それでも思い描いた通りのとっても大きな学校でした。そして、その日訪れたハーバード大学で見たヘレン・ケラーの点字の答案用紙は、なんとなく歴史上の人のように思われていたヘレンが実際の人であり、なんだか初めて彼女に出会えたような何とも言えない気持ちになりました。

その後を訪れたそれぞれのゆかりの地も、ひとつひとつ思いで深いものになりました。アメリカという国の大きさゆえに日本より進んでいる点もあれば、逆にこれは日本の方がいいと思うことも沢山あって、私は以前耳にしたフランス、スイスの盲人たちの暮らしと同様にアメリカの盲人たちもそれぞれ頑張っているのだなと思い、日本の障害者もまんざらではない、遅れをとってはいないのだと、自信を持って帰国しました。

女史の墓前にて

山崎邦男

私たちが二番目に訪れたのは、ワシントンです。滞在三日目の午後私たちは、はじめ日程になかったワシントン・ナショナル・カテドラルに、ヘレン・ケラー女史がサリバン生と眠る地下礼拝堂を訪れました。

この聖堂はイギリスのウェストミンスター寺院に模して、祖国アメリカに尽くされた各界の人々をおまつりする為にアメリカ国民一人ひとりがささやかな浄財をささげて1907年からなんと1991年までかかって築き上げた大伽藍です。私たちは、高さ40メートルを越える聖堂の中央に立ち、周囲からステンドグラスを通して注ぐ、外光を浴びることができました。そして、ガイドの案内で地下礼拝堂に降り、「ヘレン・ケラーおよび彼女の生涯にわたる伴侶、アン・サリバンがこの礼拝堂の奥に眠る」という英語点字の墓碑銘に触れたとき、私は目頭が熱くなり、しばし声も出ませんでした。皆さんの求めに応じてこの碑文を大きな声で読んで差し上げました。アメリカへの旅を真に実感した一瞬でした。

戦後間もなく、当時の東京盲学校師範部鍼灸科を終え、新潟盲学校へ奉職することとなり、爾來何度か渡米の機会を掴もうと試みましたが、機会に恵まれませんでした。一つには私の勇気の無さと、不決断があったでしょう。また、若い視覚障害者にとって50年代、60年代の渡米は一部例外は別として、無理があったと言えるでしょう。私は、本職の理療の研究のかたわら寸暇を裂いてアメリカ、イギリスの歴史、文化そして文学を貪るように吸収しました。ヘレン・ケラー女史の著書の幾冊かも読みました。そのせいか一層この日の感動は大きなものとなったのです。



At the south street seaport in New York

ツアーに参加して

木村千代子

初めての海外旅行、そのうえスタディ・ツアーこのタイトルに最初はとまどい、こんなに真面目な目的で訪問先も堅苦しい所ゆえ、とても楽しめそうにないと思っていました。でもその予想は飛行機に乗った途端一気に覆されました。私は15年前に少し学んだ英会話を思い出して一生懸命おなかから声を出して英語を話すことを心掛けたのです。とはいっても、私の話したことといえば、身振り手振りにも等しい些細な会話ばかりです。まず最初空港に降り立っただけのサンフランシスコで、今日本でも流行の黒い紐に緑の玉を通したネックレスをみつけ、その素材を訪ねたのが会話しきものの始まりで、そのネックレスは旅行が終わるまで私に勇気を与えてくれたようです。ちなみに値段は日本の半額でラッキー。

ワシントンのホテルでは、特定のドル紙幣だけを持ちたくてお釣りは10ドルと指定したところ、4枚は5ドルになりましたが親切にお金をかき集めて下さった店員さん。帰りの飛行機で免税品を買うとき残ったドルを使いたいとスチュワードに頼んだら「円かドルのどちらかにしてくれ」と云われました。機内食や飲み物のことなど訪ねられ、最初はその大声にとまどうばかりでしたが、生の英語に触れられて本当に幸せでした。

今も、なお鮮やかにアメリカの思い出が私の心をしめています。12年もの間、戦争反対の看板を掲げホワイト・ハウスの前でホームレスを続けるピシオットさん。マンハッタンのフェリーで、もう数十年靴みがきをしながら生計をたててきたおじいさん。ニューヨークのジャズのメッカ「ブルーノート」で聞いたミッシェル氏の見事なピアノ演奏。5番街の通りではクラクションの音色が夜遅くまで響いたり、ボストンの公園にときおり姿を見せてくれたリスのように、私もまだ知らない国へ勇気を持って出掛け、新たなモノを感じ取ってこようと計画を立てるこの頃です。

✕ 米国ツアー旅程表 ✕

1993年	成田空港16:40発(UA-852)【サンフランシスコ経由】
9/16(木)	約22:18着:The Boston Park Plaza Hotel泊
17(金)	バークス盲学校／ハーバード大学ラドクリフ校見学
18(土)	マサチューセッツ工科大学(MIT)見学、ボストン市内観光 ボストン・ローガン空港14:30発(UA-1451) 16:06 ワシントンD.C.着:The Capital Hilton泊
19(日)	市内観光／航空宇宙博物館見学
20(月)	国会図書館盲人部／ワシントン大聖堂見学
21(火)	ワシントンD.C.10:00発(UA-6444)、市内観光 The New York Hilton & Towers泊
22(水)	米国盲人援護協会(AFB)／ニューヨーク・ライハウス見学
23(木)	J. F. ケネディ空港12:30発(UA-803)
24(金)	成田空港15:20着、解散

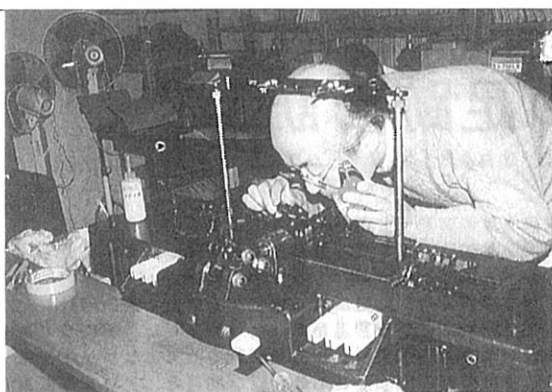
こんにちはネパール

前山博

「あの地に足を踏み入れたら、下痢性感染症は避けられない。これをネパール病と名付け、ネパール王国の洗礼と心得よ」。あの人、この人から散々脅かされ吹き込まれました。そのネパール上空に近づき、白き神々の座ヒマラヤを眺めて、面倒臭いのはお断り、この辺で墜落して六道三途でさようならで良いようにも思いました。でもちと不都合も感じます。私の死体は、医学生の解剖実習教材となる手配りがすんでいます。こんな所に落しては、おいそれと引き取りには来てくれません。第一なま物ですから鮮度が気になります。そんな空想や妄想しばしで、カトマンズ着です。

ホテル・ブルースターの前は歩道つきの大通り。その歩道わきの寺院の塀に背をもたせて、老女の物乞いがうずくまっています。歩道に立って物乞いの動静を観察している私を、二人の警察官がいぶかしげに眺めています。老女の物乞いは、どうやら視力がなさそうです。中年の男の通行人が物乞いに紙幣を渡しています。小腰をかがめ、手を取って金を握らせ、さかんに言葉をかけています。数分後にも、同じ光景が繰り返されました。

この寺院の塀の内側に、ネパール盲人福祉協会(NAWB)があり、そこに据えられた二台の製版機を診察するのが私の役回りです。日本にいれば初めてお目にかかる製版機であっても、どこに目を注げば良いのか、粗方の見当がつかます。しかし、NAWBの機械は保守・管理の悪さに加え、その場しのぎの連続で、あちこちいじりまわされており難渋します。おまけに交換部品が備えられていません。NAWBの職員に子細を聞いても、言を



左右に託して埒が明きません。

道具の持つ機能を、十分発揮させるのは手ですが、ネパール人の不器用さは滅法界もない程です。私が製版機の前に立てる時間は多くはなく、日の永い顔をしてはいられません。野人礼にならわずで、手順・段取りなど参酌せず、勝手に整備を進めます。しかし、彼らは大物です。胡乱な奴の言動など気にもとめず、機械のそばで一人が鼻唄を歌い出すと、たちまち周りじゅうの者が、つまり作事中、他人に汗をかかせておいて大合唱になります。それでいながら去り際に「私も先生のように上手な点字書きになりたい」とのたまいます。

生命力に溢れ、人が主役のカトマンズ市街。活気はあるが熱気を感じないのは、ネパール人の生きるテンポによるものでしょうか。ゆるやかな時間を生きるネパール人。特に農村の暮らしは、私たちとは違う時間を生きているように思えます。

国際社会の中で、ネパールは他国の援助に頼る国として、顔の使い分けはいたしかたないかも知れませんが、うさん臭さを感じさせない国であって欲しいと思います。(点字出版局製版課長)

TRAINING OF BRAILLE PRINTING TECHNIQUE

THKA invited Mr. Hom Nath Aryal, administrator of education of NAWB for training of Braille printing technique for 3 months from January 20, to April 17, 1994.

Mr. Aryal had 8 hours training and after the training he studied Japanese language at his own request. Therefore, he stayed at the office until 9 or 10 o'clock at night every day. It was a hard schedule but the training went well and smoothly. He planned to transcribe "History of THKA" into braille and to send them to the integrated schools and other organizations concerned in Nepal. As the result the training was successful and fruitful beyond our expectations.



The Braille Press, Nepal Association for the Welfare of the Blind (NAWB)

点字技術研修

平成6年1月20日～4月17日の3カ月間、NAWB点字出版／教育課長ホーム・ナット・アルヤル氏を当協会に招いて点字技術研修を行った。

バンコック経由の夜間飛行で成田に到着したため、その疲れもあり彼は2、3日間は東京の生活に馴染めないようであったが、直ぐに持ち前の粘り強い性格を発揮し、精力的に研修に取り組んだ。

計画では、研修は当協会の業務時間に合わせて午前10時～午後6時までであったが、本人の強い希望でその後日本語の特訓を2カ月間行い、連日9時、10時まで続けた。しかも、彼は毎日5時に起きて日本語の予習と復習を行っていたそうであるから、大変な努力家である。

この間、本来の研修も順調に行われ、彼の企画で当協会の「英文概要」を点字に翻訳し、ネパールの統合教育校と関係機関に郵送することになった。指導を受けながらも独力で最後の発送まで行ったこの経験は、研修を更に内容の濃いものにした。

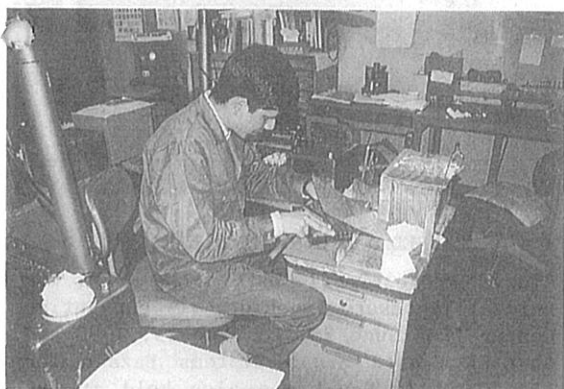
また、研修の最終段階で行った京都ライトハウス点字出版所でのプラスチック原板を用いた技術研修と、大阪市立盲学校での体育実技の研修は、想像以上に本格的で、ネパールですぐに実践できる内容であったため、非常に有意義であった。



研修内容

三カ月間(1994. 1/20 - 1994. 4/17)のMr. Hom Nath Aryalの研修は、下記のように多彩なものであった。

- ①点字製版実習
- ②点字印刷および製本実習
- ③点字製版機の保守・点検
- ④二級英語点字の学習
- ⑤点字「英文協会概要」の作製と発送
- ⑥日本語研修
- ⑦録音図書製作実習
- ⑧盲人用ミシンの使い方
- ⑨施設見学(東京): 日本点字図書館
- ⑩プラスチック原板加工実習: 京都ライト・ハウス
- ⑪体育実技: 大阪市立盲学校
- ⑫施設見学(大阪): 点字毎日、日本ライトハウス



アオカと24時間テレビ

バラ郡をフィールド、あるいはその一部にする日本のNGOは当協会以外に、アジア眼科医療協力会(AOCA:7カ)と「24時間テレビ」があります。非公式な形ですが、これまでこの二つの団体から、色々な形で協力を受けてきました。特にアオ

カの黒住格先生には、ネパールでのNGOの先輩としてまた、眼科医としての専門的助言を様々な局面でいただいております。

アオカと「24時間」は、バラ郡に隣接するビルガンジのケディヤ眼科病院を拠点にナラヤニ県全域で眼科医療活動を行っています。バラ眼科診療所に巡回してくる医師のうちの一人は、これらの団体の下でケディヤ眼科病院から派遣されています。逆にこれらの団体がバラ郡で、開眼手術のためのアイ・キャンプを行う時は、バラCBRセンターが総出で協力を行っています。もっとも、これは当協会が開眼手術のプログラムを持っていないので、現地でキャンプを開いてもらっているというのが実情のようです。

失明防止が国家事業になったことから、このような関係がさらに他の団体、政府機関との間でも強まるのではないかと、地元では期待しています。

アジアの風とせせらぎをきく
Charity Concert



1993年11月19日、「なかのZERO小ホール(旧中野文化センター)」にて、アジアの民族楽器を取り入れたユニークなジャズグループ「ネオ・オリエンタルⅡ(セカンド)」とジャズ・ピアニスト河野康弘さんのジョイント・コンサートを開催しました。

このチャリティ・コンサートは二部構成になっており、1部ではネオ・オリエンタルⅡが演奏を担当。スライドで次々に映し出されるネパールの風景をバックに、インドの民族打楽器タブラの軽快な音が響き、それにピアノ、ベース、ボーカルと幻想的な余韻を残すシタールが加わり、不思議な音楽世界を醸し出しました。

第2部は、日本に残る最後の清流といわれる四万十川のスライドをバックに、河野康弘氏がソロピアノを聴かせました。同氏は、ピアノ演奏を通じて環境破壊の進む日本の河川の保護を訴えるユニークなツアーを年間約200カ所で行っています。

当日は、この種の試みとしては異例の盛況で、演奏者のCDが完売になりました。また、ロビーでは、ネパールでの活動を紹介する写真展も、ボランティアの協力で行われました。

このコンサートは、当協会発行のテープ・マガジン「週刊ニュース・プラス」編集部が、海外援護事業を応援するために、東京ガス株式会社のご協賛を得て企画したもので、収益は全額ネパールでの盲人援護事業に使われました。

本年(1994年)12月21日(水)にも、同会場にて同様のコンサート開催を計画しています。詳しくは『ニュース・プラス』編集部 ☎03-3200-0810へ



バザールで、ござ〜る
Charity Bazaar

1993年6月23日〜25日、池袋サンシャインシティコンベンションセンターにおいて「AES東京コンベンション'93/プロオーディオ総合機器展'93」の一環として《チャリティ・バザール》が開催されました。

最新のプロ用オーディオ機器が一堂に並ぶ会場の一角には、各オーディオメーカーやレコーディングスタジオ、P A会社から提供されたプロ仕様のレコーダー、スピーカー、マイク、各種パーツなどが所狭しと並び、大盛況でした。中でも骨董品のような往年の名器が注目を集め、その前で懐かしそうに語らうOBの姿が印象的でした。

当協会はこのコーナーで、ネパールでの国際協力の写真展をおこなうとともに、運営にも協力し、収益の一部939,480円が、協賛各社より寄付されました。この寄付金は、全額ネパールの視覚障害児の教育およびリハビリテーションのために使わせていただきました。ご協賛いただきました各社、および同展実行委員会に対し厚く御礼申し上げます。



REUSED AUDIO SYSTEMS BAZAAR

"Tokyo Professional Audio Show '93" was held at Ikebukuro Sunshine City Convention Center from June 23, to June 25, 1993 and Charity Reused Audio Systems Bazaar for the blind in Nepal was also held at the same time.

Y. KONO & NEO ORIENTAL SECOND

November 19, 1993, THKA held a charity concert at Nakano Zero Hall where a unique jazz group "Neo Oriental Second" performed with their South Asian music instruments, and a jazz pianist, Mr. Yasuhiro Kono played the piano.

1993年度事業報告

1. 視覚障害者リハビリテーション(CBR)事業

本年度も郵政省国際ボランティア貯金の配分金を受けて、ナラヤニ県バラ郡においてCBR事業を実施した。特に本年度は、フィールド・ワーカー6名を新規採用し、これまで手着かずに残っていたバラ郡の空白区を個別調査しCBRに着手した。これにより本事業は、文字通りバラ郡全域を網羅した完全なものになった。

本事業の一環としてこれまで実験的にやってきたビタミンA配布事業は、今年度からネパール政府の国家事業として全国的に展開することになった。そして、これまでの実績が認められ、バラ郡から開始されることになり、ネパール政府からバラCBRセンターに協力要請があった。現地ではこれに応じ、これまで培ったノウ・ハウと機材、人材を活かし失明防止講習会などとリンクさせて、この事業を推進することになり、3月3日と4日の両日、CBRセンターにて「失明防止講習会」を開き、早速ビタミンA剤配布を行った。

2. 点字出版事業

今年度も初等～中等教育(第1～10学年)課程の点字教科書80タイトルを作成し、ネパール全土の統合教育校26校(盲学校1校を含む)に配布した。本事業に使われている点字製版機と印刷機2セットは、1987年と1988年の2回に分けて当協会から送ったものであり、その後本格的な点検・整備は行われていなかったため本年1月、製版機の技術専門家を現地に派遣し、消耗部品の交換と重要箇所の分解調整を行った。

3. 統合教育事業

昨年度開発したバラ郡の統合教育校3校にて引き続き、特殊教育のプログラムを実施した。そして、この地における統合教育の質的向上を目指して、CBRセンターにてこれら3校の教員を集め3月14～17日の四日間「教育講習会」を実施した。

4. 洪水被災障害者救援事業

昨年夏の史上空前の洪水で、バラ郡に隣接するロータート郡は大規模な被害を受けた。これに対してバラCBRセンターでは、被災直後に現地で義援金を集め、救援活動を行った。また、当協会では被災地の復興のために、本年1月14日に現地を訪問し、洪水の被害を受けた盲人と他の障害者約100家族に対してそれぞれ500ルピーの義援金を手渡した。この模様は現地の国営新聞にも大きく報じられ、予想外の反響を呼んだ。

5. スタディ・ツアーの実施

昨年9月、「ヘレン・ケラー女史の足跡を訪ねて」と銘打った視覚障害者を対象にしたツアーを近畿日本ツーリストの協力を得て企画した。本ツアーは女史が学んだ、ボストンのパーキンス盲学校、ハーバード大学ラドクリフ校、女史が相談役を務めたニューヨークの米国盲人援護協会

(AFB)、女史が眠るワシントン大聖堂などを巡る旅で、この種のものとしては初の企画であったため、スタディ・ツアーにもかかわらず参加申し込みが殺到したので急遽定員を増やして実施した。

6. 点字出版技術研修生の教育

本年1月中旬～4月中旬までの3カ月間、NAWBホーム・ナット・アルヤール点字出版課長を当協会に招き、点字出版技術の研修を行った。氏はカトマンズの語学学校であらかじめ日本語の基礎を学んでいたため、研修はすべて日本語で行った。氏は真面目で礼儀正しく、自ら進んで夜遅くまで熱心に研修に取り組んだため、研修は当初の予想以上の進歩を見た。

7. NGO諸団体との連携と協力

①8月28日「ネパールNGO連絡会(NNNN)」設立総会に参加し、本連絡会に加入した。②10月18、19日「アジア太平洋障害者の十年キャンペーン'93国際NGO沖縄会議」に参加した。

③12月13日、日本障害者リハビリテーション協会が中心になり、「障害分野NGO連絡会(JANNET)」が結成されこれに加入した。

8. 広報・募金活動

「愛の光通信」第8号を発行して広報・募金活動を行うと共に、各種団体やボランティアの力を借りてチャリティー・バザー、チャリティー・コンサート、ネパール写真展など多彩な活動を行った。

9. その他

当協会の活動は下記のような新聞等の媒体により各方面に紹介された。

「IYDP情報」1993年4月号、

「障害者の福祉」1993年7月号

「毎日新聞(夕刊)」1993年9月6日付

ネパール国営新聞「ゴルカ・パトラ」1994年1月14日付

「福祉新聞」1994年1月24日付

「ジャネット・ニュース・レター」1994年4月号

✕ ツアー参加者リスト ✕

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 【1】北川三生(東京) | 【2】北川八束(東京、付添) |
| 【3】下澤仁(団長、神奈川) | 【4】下澤幸子(神奈川、付添) |
| 【5】松葉幸子(茨城) | 【6】松葉恵(茨城、付添) |
| 【7】谷口十三雄(静岡) | 【8】酒井光二(静岡、付添) |
| 【9】西田登喜子(和歌山) | 【10】前島房恵(大阪) |
| 【11】山崎邦夫(新潟) | 【12】山崎富蓉(新潟、付添) |
| 【13】石川純子(福岡) | 【14】石川嘉子(福岡、付添) |
| 【15】阿佐博(東京) | 【16】松下明(東京、付添) |
| 【17】田中利恵子(東京) | 【18】木村千代子(大阪) |
| 【19】島田陽子(奈良) | 【20】岸田典子(大阪) |
| 【21】古市薫(福島) | 【22】叶政勝(神奈川) |
| 【23】菅野公妙(神奈川、誘導) | 【24】菅原温子(東京、誘導) |
| 【25】竹田功(福島) | 【26】佐々木秀明(協会職員) |
| 【27】関野てる子(神奈川、誘導) | 【28】福山博(協会職員) |
| 【29】伊藤嵩(近畿日本ツーリスト) | ※誘導:ボランティア |

1993年度収支計算書

自 平成5年4月1日
至 平成6年3月31日

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
事 務 費	2,863,112 円	寄 付 金 収 入	11,472,429 円
賃 料	750,000	協 賛 金 収 入	509,000
旅 費	357,854	助 成 金 収 入	7,428,000
消 耗 品 費	397,897	募 金 収 入	3,535,429
一 般 物 品 費	135,000	事 業 収 入	1,116,000
印 刷 費	178,653	販 売 収 入	136,000
役 務 費	240,178	チャリティコンサート収入	980,000
会 議 費	127,980	雑 収 入	281,940
借 料 損	266,232	雑収入	281,940
原 稿 料	56,661		
雑 費	352,657		
事 業 費	11,162,662		
チャリティコンサート費	787,054		
海 外 出 張 費	2,444,437		
海 外 援 護 費	148,620		
海外援護費(郵)	5,527,306		
国内調達機材費	401,700		
現 地 運 営 費	735,162		
事 業 管 理 費	68,365		
研 修 費	431,007		
通 信 費	423,243		
雑 費	195,768		
小 計	14,025,774		
当 期 繰 越 金	△1,155,405		
合 計	12,870,369	合 計	12,870,369

貸借対照表

平成6年3月31日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産	5,900,058 円	繰 越 金	5,900,058 円
現 金	247,273	前 期 繰 越 金	7,055,463
預 金	5,652,785	当 期 繰 越 金	△1,155,405
資 産 合 計	5,900,058	純 財 産 合 計	5,900,058

協賛者ご芳名 (五十音順・敬称略)

赤城村	AKI音楽事務所	天塩	阿見町	有賀信勇建築事務所
栗津農協	伊東カントリークラブ	伊東製作所	伊奈町	茨城食糧
上野運輸商会	英数研究所	オーク	大橋サービス	岡田不動産
神奈川銀行	河津町	関東開発	木更津高校	紀文食品
九州ガス	暁星学園	九段会館	光葉企業	金毘羅宮
笹島工業	サウンド・クラブ	サニークントリークラブ	静岡英和女学院	資生堂労組
主婦の店	聖徳学園	白菊酒造	自交総連	順心女子学園
信栄製紙	住友スリーエム	関宿町	聖和学院	全理連
草月会	空知信用金庫	第一スーパー	大東ガス	立川ブラインド
多摩ヤクルト販売	中京大学	鶴川高校	電源開発	トーエイ電装
東京専売病院	東洋水産	内藤電設工業	波崎町	野村証券
花巻市	パイオニア労組	平岡ボデー	藤井脳神経外科	富士通ゼネラル
富士通労組川崎支部	船引町	ファイザー製薬	文化女子大(室蘭)	マサカネ
松本電器	丸山記念病院	美浦村	宮下ヒロシ	三越労組
武蔵女子学院	柳津町	山一証券	山方町	ヤマトヤ商会
横山光輝	立正佼成会	ロッテ労組		

寄付者ご芳名 (五十音順・敬称略)

自 1993年4月 1日
至 1994年3月31日

(個人)

青木 貞子	青木 陸輔	秋山 恭子	秋山 俱子	浅倉 久志	浅田 きよか
天野 治夫	荒木 薫	荒田 佐多子	在田 一則	井口 淳	池田 富夫
石井 桃子	石川 はな	石川 昌宏	石川 保司	石原 幸栄	石光 貞子
市角 誠	市原 政春	出田 敦子	伊藤 啓子	伊藤正男	井上 聡
今泉 新治	井村 恵津子	入江 一恵	上田 文良	上野 伊津子	鶴飼 信子
内山 武志	遠藤 康弘	及川 昭文	大芦 明	大内 三良	大岡 信
大川 真	大西 章夫	岡田 由幾子	岡野 マスミ	尾形 仵	小川 元
小川 喜道	小倉 淳一	小河 静	小田 淳	小野 日央	折戸 正明
賀川 友吉	加来 典子	片桐 武昭	勝又 誠子	加藤 晃	金森 なを
金田 一郎	金田 正一/敏子	神谷 辰夫	香山 千加子	川上 勲	川崎 力
菅野 公妙	北浦 滋夫	吉良 洋子	久保 良三	汲田 冬峰	汲田 克夫
栗田 美代	黒崎 久	小泉 周二	高坂 正堯	河野 憲利	河野 康弘
肥塚 美和子	肥塚 隆	小平 嘉清	小林 一弘	小林 明子	小森 愛子
近藤 文郷	紺野 敏雄	後藤 良一	後藤 ふたば	後藤 晴子	三枝 礼子
斉藤 績	斉藤 千宏	坂本 明弘	桜井 文男	佐古井 貞行	佐々木みつ子
藤 睦子	佐藤 利村	サトウ サンペイ	佐藤 テル	三遊亭 京楽	三遊亭 小遊三
塩月 弥栄子	塩屋 賢一	志村 洋	白井 雅人	白木 幸一	新谷 君子
菅原 ふく	杉野 義次	砂賀 忠彦	曾野 綾子	鷹田 嘉代	高橋 輝雄
竹村 実	田中 亮治	田中 雅治	田中 さ加恵	田中 茂	谷内 正史
谷川 俊太郎	玉谷 都千恵	田村 和凡	千田 耕基	辻 三郎	辻井 喬
寺島 アキ子	照井 博	外山 雄三	鳥山 由子	土井 暢子	直居 鉄
中曾 栄吾	中山 弘子	長島 好夫	長屋 久美子	成田 稔	能戸 勝男
西方 義保	西條 一止	西田 登喜子	西本 行男	野田 寛	橋本 三郎
八田 公雄	塩谷 雄高	林 鳳紘声	早田 義博	端山 智弘	原田 美男
肥後 信之	檜山 美代子	桧山 寿子	樋渡 敏也	福原ササノ	藤井 誠司
藤田 良子	藤本 和美	本間 一夫	前島 房恵	前田 修	政本 ゆたか
松尾 宏之	松下 信雄	松村 太郎	真鍋 静子	丸山 雄一郎	水間 保実
三宅 正太郎	宮崎 勇	ミヤザワ レイコ	宮原 満洲男	百瀬 皓	森 雄士
森 典子	森村 誠一	森本 哲郎	両角 征吾	諸藤 フサ子	柳家 小さん
柳瀬 嵩	藪内 清	山岸 信義	山口 和子	山口 節子	山田 あき子
山田 隆造/元子	山内 潤子	山本 俊雄	山本 景子	吉田 旬	吉田 重子
米田 昌徳	若林 弘子	渡辺 直明	渡辺 哲男	和田 文子	
物品寄付:	佐藤 利村	石川 純子			

(団体)

アイマスクを成功させる会

エアメールサービス

鐘紡若里自由学院生徒会

国際協力フェスティバル募金箱

(株)サウンド・クラフト

(有)ジャパン・サウンド・サービス

(有)ディーアンドエーミュージック

日本障害者リハビリテーション協会

ふじ治療院

三菱電機(株)郡山製作所

(財)早稲田奉仕園

(株)アドベンチャーロード

(有)大本印刷

近畿日本ツーリスト池袋サウスイング支店

小林動物病院

兵庫県立佐用高校同窓会

高松キワニスクラブ

錦紙商事株式会社

日本エレクトロハーモニックス(株)

ポーズ(株)営業企画課

(有)やなせスタジオ

医道の日本社

オタリテック(株)

岐阜盲学校高等部生徒会

東京衛生学園専門学校

関西電気

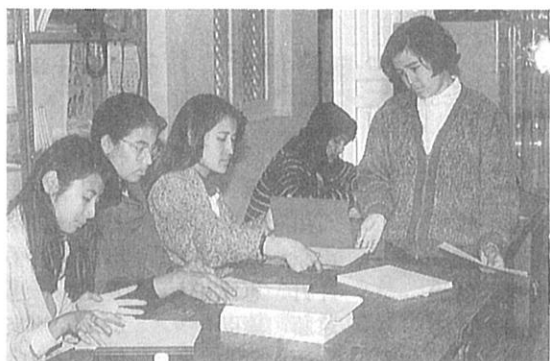
(株)テクニランド

西牟田語学院

(株)パップ技術営業部

間宮製作所

ローランド(株)



写真右は、ネパール盲人福祉協会(NAWB)で奉仕作業を行う女子大生。これも『国連障害者の十年』が残したもののひとつです。しかし、発展途上国では、障害者福祉はまだ緒についたばかり。これをさらに継続して進めるため、『アジア・太平洋障害者の十年』が昨年から始まりました。

東京ヘレン・ケラー協会
オリジナルテレフォンカード
頒価2,000円(2枚セット)



ヘレン・ケラー女史のポートレートと、ヒマラヤを背景に日本の盲人がトレッキングを楽しんでいる様子をデザインした、オリジナルテレフォンカード2枚組。とりわけ女史の自筆サイン入りの写真は貴重です。本テレフォンカードの純益は、すべてネパールの盲人援護に使われます。

募金のお願い

ネパールにおける失明防止と視覚障害者援護をさらに充実するために、募金をお願い致します。
寄付金のご送金は、下記口座をご利用下さい。

郵便振替：00150-5-91688
銀行口座：さくら銀行新宿支店(普)5101190
シティバンク吉祥寺支店(当)0900095

寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第217条第1項第5号および、法人税法施行令第77条第1項第5号にかける社会福祉法人でありますので、当協会に対するご寄付は、所得税法第78条第2項第3号、法人税法第37条第3項第3号の規定が適用され、税法上の特典が受けられます。

編集後記

「ヘレン・ケラー女史の足跡を訪ねて」と銘打て、米国ツアーを行いました。安全確保に費用がかさんだとはいえ、オフ・シーズン398,000円の視察代金はけっして安いとはいえず、果たして参加者があるのか気掛かりでしたが、蓋を開けてみると定員を増やしても断らざるを得ない大盛況でした。興奮は帰国後も続き、点字で綴った感想が多数寄せられました。本号に掲載した分は、その一部です。大幅に削除してもなお、全員の感想を載せられず、しかも活字が小さくなり読みづらくなったことをお詫びいたします。
ネパールでの事業も順調ですが、就学できた盲児はまだ1%に過ぎません。峠はまだ遠く、ゆっくり歩く以外に手は無いようです。皆様の変わらぬご声援を、今後ともお願い致します。



**TOKYO HELEN KELLER
ASSOCIATION**

Established 1950

14-4, Ohkubo 3-chome, Shinjuku-ku, Tokyo 169, Japan

発行：社会福祉法人 東京ヘレン・ケラー協会
海外盲人援護事業事務局

住所：〒169 東京都新宿区大久保3-14-4
TEL: 03-3200-1310 FAX: 03-3200-2582